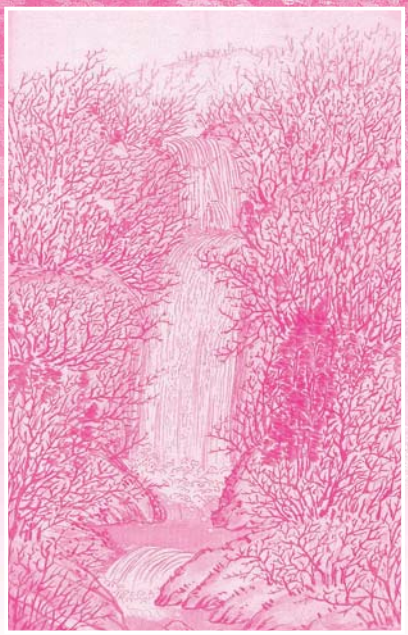
秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI

No.28



「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第５２回企画コーナー展

真澄、下北の旅

平成２２年

7月10日（土）
～8月22日（日）

菅江真澄は、松前（北海道）から下北半島に渡った寛政４年（１７９２）10月からの２年半、下北半島全域をめぐりながら、その風土や人々の生活のようすを詳しく記録しました。

現存する６冊の日記は、春夏秋冬で分けられていることから全体像がつかみやすい上、現在でも真澄の足跡をたどることが比較的容易なことなど、魅力にあふれた著作になっています。また、日記の書きぶりはテンポが良く、事物を記録したあとに歌で締めくくるなど、旅日記として体裁の整った著作ともなっています。

本展では、下北関係で現存する６冊の日記、ならびに未発見本である３冊の日記について、その概要と足跡を紹介するとともに、現在でも下北に残る真澄関連の資料を紹介しました。

《牧の冬枯》

（寛政４年冬、図絵なし）

【松前から下北に渡る。北部を巡り大畑・田名部へ】

松前から奥戸（大間町）に着いた真澄は、佐井（佐井村）にある箭根森八幡宮を訪ね、その由来を詳しく書き記した。ラクスマン来航を聞いた直後の下北への渡海であった。奥戸から大畑（むつ市大畑町）に移り、さっそく、土地のうた人たちと交流を持ったあと、田名部（むつ市街）から初めて恐山に登った。わずか二日だけの滞在であったが、信仰の地・恐山のようすを書き記している。田名部、大畑に戻った真澄は、歌を詠み合う日々を送りながら、三年婿や三年嫁、さいとりかばなどの珍しい習俗を記録するほか、盛岡藩の成立時に由来する「私大」を記録した。

《蝦夷がいはや》

（寛政５年春か？）

【未発見本。下北北部を巡った日記か？】

寛政５年春（１月～３月）の日記と考えられる。書名は、《奥の冬ごもり》の石持（東通村）の袰崎明神を記した箇所の天註部分に出てくる。「蝦夷がいはや」が尻屋（東通村）に近い場所であることは《牧の冬枯》の記述から知られ、さらに、この日記が寛政５年春であったことは、《おぶちの牧》寛政５年11月27日の砂子又（東通村）での記事に、「春一夜宿りたる、河のべのあやしの翁がやをとへば…」とあることから知られる。正月を田名部で迎えたことは《奥の手ぶり》の記述で知られることから、《蝦夷がいはや》では、田名部から尻屋崎（東通村）まで行き、下北半島の北部をめぐって、４月１日までに《奥の浦々》の佐井まで行ったものと考えられる。

《奥の浦々》

（寛政５年夏、図絵７図）

【下北西岸の浦々から下北南部を巡る。恐山の大祭を見る】

真澄は、佐井から長後・福浦・牛滝（いずれも佐井村）の浦々を船で巡り、景勝地仏ケ浦を見ている。いったん佐井に戻って歌の交流をした後、陸路、西海岸から脇野沢（むつ市脇野沢）、川内（むつ市川内）を通り、田名部に帰った。中島公世の家に宿った真澄は、公世とともに恐山に湯治に行き、一度田名部に戻った後、再び恐山に登った。恐山では大祭である地蔵会があった。大勢の参詣人が戒名を書いた薄い板を供え、亡き人の名を叫んだり念仏をあげたりする、と書き記している。

《牧の朝露》

（寛政５年秋、図絵６図）

【下北北部を巡る。ラクスマン来航と藩営牧場に関わる記事】

田名部と大畑を往復しながら滞在していた真澄は、下北地方の七夕からお盆にかけての習俗を書き記している。その後、易国間（風間浦村）を中心にして40日程滞在し、その間、ラクスマン来航に関わる幕府宣諭使の一行のことを記録した。易国間から下風呂、赤川、ちぢりが浜を通り（それらの図絵を描く）、大沢（むつ市大畑町）に立ち寄った真澄は、藩営牧場である大間の牧・奥戸の牧で飼われていた馬が田名部に曳かれていくのを見た。その後大畑に戻っている。

《おぶちの牧》

（寛政５年冬、図絵３図）

【南下して故郷を目指すが、途中で断念して田名部に戻る】

大畑に宿っていた真澄は、南下して故郷に帰る意思を示した。田名部で一ヶ月以上滞在して別れの歌会で過ごした後、とりあえず歌枕・尾駮の牧を目指した。途中から荒れた天気になり、尾駮村付近で雪のために南下を断念、再び田名部に戻ることにした。田名部に戻った真澄のもとに、松前から久しぶりの手紙が届き、知り合いの近況を知った。その後、真澄は田名部の人々と歌の交流をした。

《奥の手ぶり》

（寛政６年春、図絵６図）

【田名部の正月行事、冬の恐山を記す。文子の方（松前）からの手紙を受け取り、再度の松前渡海を希望か？】

真澄は下北の大正月から小正月にかけての行事を細かに記録し、小正月に子どもたちが行う「かせぎとり」や、女性が早乙女衣装で踊る「藤九郎」など、珍しい習俗に関わる４図を描いた。この日記では、恐山に二度登っている。氷が張った宇曽利山湖を渡り、木こりたちがヒバ材を橇に積んで山から下ろす作業や、山小屋での食事のようすを記録した。日記の中で、真澄が二度、望郷の念を述べていることも特筆される。

《千引のいし》

（寛政６年夏か？）

【未発見本。歌枕「千引の石」と「壺の碑」を探訪】

《奥の冬ごもり》の記述にある、菊池成章

が真澄に返却した五冊の日記の内の一冊である。成章と真澄が詠み合った歌から、歌枕の「千引の石」と「壺の碑」を訪ねた寛政6年夏の日記と考えられる。「千引の石」は歌書の『俊頼髄脳』、「壺の碑」は歌書の『袖中抄』で取り上げられるほど有名で、真澄の時代は、いずれも現在の上北郡七戸町と東北町の集落であると考えられていた。

《牧のなつくさ》

（寛政6年夏か？）

【未発見本。歌枕「尾駮の牧」を探訪】

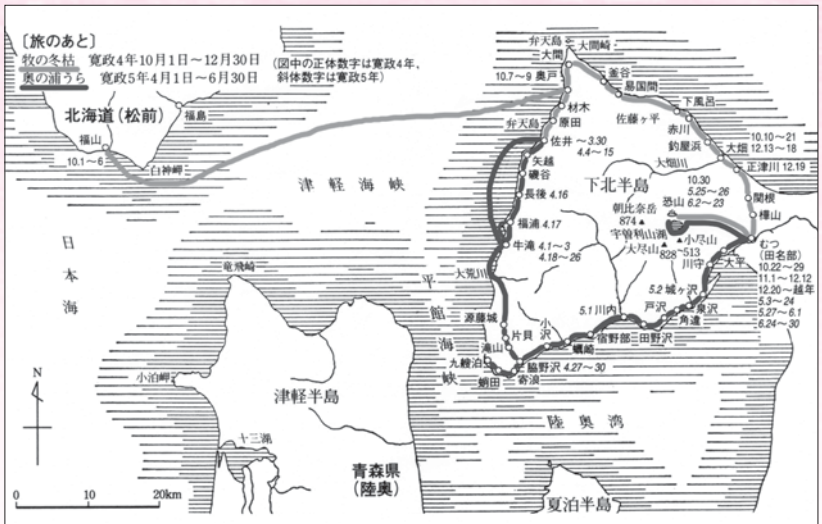
《奥の冬ごもり》の記述にある、菊池成章が真澄に返却した五冊の日記の内の一冊である。返却に際して成章が詠った歌から、歌枕「尾駮の牧」を訪ねた際の日記であると考えられる。真澄は寛政5年冬の日記《おぶちの牧》で、歌枕「尾駮の牧」と考えられていた尾駮村（六ヶ所村）までたどり着いたが、尾駮の牧の後継とされる藩営牧場の有戸野牧の馬も雪のために見ることができずに、再び田名部に戻っていた。そのため、寛政6年の夏に再び「尾駮の牧」を訪ねた際の日記が《牧のなつくさ》と考えられる。

《奥の冬ごもり》

（寛政6年冬、図絵5図）

【田名部を中心に滞在。下北を旅立つ決心をするが、人々に止められる】

田名部を拠点に暮らしていた真澄は、石持（東通村）に小石を生む石神を見に行き、再び田名部に戻っていた。11月に入ると赤川の滝（むつ市大畑町）を見に出かけ、その帰り、大畑に7日間ほど滞在した。田名部に戻った真澄は、菊池成章に貸していた五冊の日記を歌とともに返却されている。真澄は、いよいよ下北を旅立つ決心をするが、人々に引き留められて、越年することにした。成章に目薬を贈った記事も珍しい。



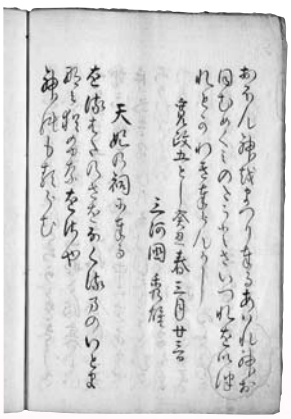
旅の足跡図（『菅江真澄遊覧記３』平凡社東洋文庫の付図を利用）
本図は、《牧の冬枯》《奥の浦々》の足跡を示している。

下北・真澄関連資料

主な展示資料
◎弥佐宛書簡　◎「渋田家の古椿」　◎菊池成章宛書簡（以上、佐井村・渋田昌平氏蔵）
◎勅点和歌集　◎「万治寛文のころほひ」
◎法楽和歌「さゐみなと」（以上、佐井村・岩清水秀一氏蔵）
◎奥の手ぶり復刻本・校訂本　◎柳田国男「正月と鳥」原稿（以上、館蔵）

◎天妃神社録（大間町・大間稲荷神社蔵）

本資料自体は、大間（青森県大間町）にあった天妃神社の縁起を、明治9年（1876）に書き上げたものである。この中に、「三河国秀雄」の署名のある縁起が書き写されている。



真澄が書いた天妃縁起は、次の五つの内容に分かれる。
①天妃を祭った伊東氏の伝承　②真澄による神像実見記　③『学山録』の紹介　④日本の船霊信仰と中国の天妃信仰　⑤「天妃の祠に奉る」真澄の歌

◎中島公世書簡〈仮題〉（佐井村・渋田昌平氏蔵）

渋田家が家屋を改築した際、襖の下張りから出てきた断簡資料の一部である。人名から、真澄と同時代の書簡や歌の反故紙と考えられる。

◎石川忠房法楽和歌（佐井村・岩清水秀一氏蔵）

ラクスマン来航に際して、幕府の宣諭使を務めた目付・石川忠房が、佐井村の箭根森八幡宮に奉納した歌。「草枕かりそめならぬくみありてふたゝびはこぶ神の広前」とある。

第５３回企画コーナー展

没後30年、内田武志の真澄研究

平成22年 １０月２３日（土）～１２月５日（日）

真澄研究の第一人者であった内田武志（うちだたけし）が亡くなってから、今年で30年目にあたります。内田は不治の病の病床にありながら、生涯を旅で過ごした菅江真澄を研究し続けました。そして、真澄の膨大な著作を順序づけ、記録の持つ意味の解読に生涯を捧げました。その業績は真澄研究の礎となり、没後30年を経過した現在でも真澄に関わる研究に大きな指針を与え続けています。

本展では、当館が所蔵する「内田文庫」を中心に、内田による真澄研究の経緯と、やがて到達することになった真澄像について紹介しました。また、兄武志の研究を支え続けた妹ハチの真澄研究についても紹介しました。

内田武志（本名・武）
明治42年（１９０９）～昭和55年（１９８０）
内田ハチ
大正2年（１９１３）～平成10年（１９９８）

1 民俗学研究への道

菅江真澄研究の第一人者であった内田武志は、八幡平村（現鹿角市、戸籍上は尾去沢鉱山）で生まれました。病気療養のために移り住んでいた静岡市で、武志は詩人の蒲原有明と知り合い、そのすすめで、昭和５年（１９３０）頃から民俗学の研究を始めました。血友病のためにほとんど外出できない病身であったため、主として調査票方式を用いて民俗語彙や昔話に関する論考を次々と発表しました。この民俗学研究を始めてから、本名の「武」を改め、「武志」を用いています。武志の民俗学研究は、その後の真澄研究の礎になりました。

昭和22年頃（武志と妹ハチ）

2 真澄研究のはじめ

武志が真澄研究に取り組んだのは、戦争疎開のために毛馬内町（現鹿角市）に来てからのことでした。真澄の著作が収載された『秋田叢書』と『秋田叢書別集菅江真澄集』から民俗事項を抜き出すなどの作業を始めました。

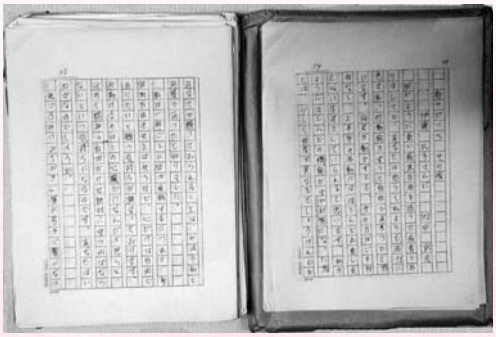
妹ハチの勤めの関係で秋田市に移り住んだ武志は、鹿角での学習を素地にして、昭和21年（１９４６）５月に『真澄遊覧記総索引 歳時篇』を菅江真澄研究会編として出版しました。その後、真澄著作の抄録本を出版する一方で、未刊文献の翻刻作業を進め、昭和28年と翌29年にはそれぞれ『菅江真澄未刊文献集一』、『同二』を出版しました。

『秋田叢書』本編全12巻のうち、真澄の地誌・勝地臨亳が収められた８巻。『鹿角方言集』を著した内田武志が、郷里秋田での研究を菅江真澄に定めたことを知った毛馬内町長・伊藤良三が、『秋田叢書別集菅江真澄集』全６巻とともに贈ったものである。ここから武志の本格的な真澄研究が始まった。

3 空白の十年間

昭和28年（１９５３）と昭和29年の両年、盲目の少女・須藤春代の詩集『めぐみ』と詩文集『春のだいち』が出版されました。両書のそれぞれに「あとがき」と「春代さんのあゆみ」を書いたのを境に、その後十年間、武志は真澄関係の論考をまったく発表しなくなりました。

周囲にある旧来の考え方と闘いながら強く生きることを春代に教える一方で、武志は不治の病と闘う自分自身と向き合っていました。真澄研究の空白の十年間は、武志自身が自己形成のために苦悩しながら、真澄の人物像を考究する時期になりました。



「春のだいち その後」未発表原稿
盲目の人たちが世間の無理解の中でいかに生きてきたかをまとめ、障害を克服しながら人間らしく生きていくことを説いている。200字詰原稿用紙351枚の前編を昭和30年８月、196枚の後編を昭和34年６月に脱稿したが、いずれも出版されることはなかった。

4 真澄遊覧記の普及

昭和40年（1965）～昭和43年、平凡社東洋文庫のシリーズとして『菅江真澄遊覧記』（全五巻）が出版されました。年代順に取り上げた日記を現代語訳にした同書は、真澄の著作を多くの人たちが読むことを可能にし、真澄の存在を世に知らしめることに貢献しました。現代語訳は杉本圭三郎（当時法政大学講師）、注解は民俗学者の宮本常一が主として行い、武志は解説を書き、分担原稿の補訂を行う責任を持ちました。また武志は、『菅江真澄の旅と日記』（未来社）を著したり、墓前祭の催行に関わったりするなどして、真澄遊覧記の普及に努めました。

真澄没後140年祭、墓前での記念写真（昭和44年）
最前列左から２人目がハチ、６人目が秋田の民俗学をリードした奈良環之助

5 テキストの確定（全集本の編纂）

真澄の著作を原文で読みたいとの機運の高まりと、秋田叢書本以降の研究を踏まえた体系的な全集本が望まれ、未来社から全集が出版されることになりました。その編纂にあたって武志は、可能な限り自筆本のコピーをとり、それを秋田叢書本などと照合して、テキストとして確定していきました。真澄の旅の全貌と人間像を明らかにするには、何よりも正確なテキストが必要でした。昭和46年3月から始まった『菅江真澄全集』の出版は、昭和56年まで続きました。武志は、第十二巻の解題を書き終えて、昭和55年12月3日に亡くなりました。

65歳の内田武志（昭和50年９月）
全集本の解題執筆の頃

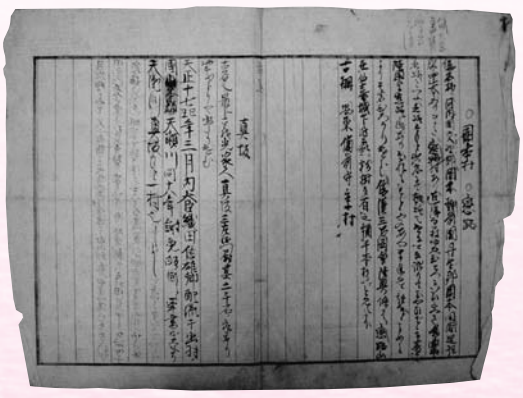
6 「真澄」人物像の追究

武志は全集本の編纂を進める中で、それまで考究されないままになっていた資料を再考するなどして、真澄の漂泊の根源をあらためて考えるようになりました。

武志は、真澄を「おのれの素性に疑念を持って〈人間とは何か〉を問題として、その生涯を苦悩し、追究した人である」とする、「真澄」人物像を確立していきました。それは、武志の35年にも及ぶ真澄研究の成果であり到達点でもありました。武志による真澄の人物像の考察は、『菅江真澄全集』別巻一「菅江真澄研究」の全17章にまとめられました。

7 内田文庫の資料から

当館が収蔵する「内田文庫」は、菅江真澄資料センターが開設される前年の平成７年（1995）、武志の妹ハチから寄贈されたものが中心です。「内田文庫」には、武志が真澄研究に使った図書や資料だけではなく、病身の武志を助けながらハチ自身が行った真澄研究に関する図書・資料も含まれています。一部は、スタディルームで公開しており、閲覧が可能です。



断簡「花の出羽路秋田郡」
全集編纂の過程で収集した資料の一つ。写真は料紙の裏面にあたる。

内田武志の受賞歴

昭和29年秋田市文化章―ハチと共に受章―
昭和42年秋田県文化功労章―ハチと共に受章―
昭和45年度河北文化賞（河北文化事業団）
昭和50年柳田国男賞（柳田賞委員会）

秋田県文化功労章の楯、記章
楯の裏に貼られたプレートには、受章者として「内田武・内田ハチ」の名が刻まれている。

第５４回企画コーナー展

真澄引用の軍記物

平成２３年 2月5日（土）～3月21日（月・祝日）

菅江真澄が土地にまつわる故事や歴史を記録する際、書物で見たり土地の人から聞いたりした合戦を取り上げることがあります。それは、近世以前に起きた合戦から、その土地の状況や人物、さらには時代背景などを引き出して、生き生きと記録するとともに、故事や歴史を証明する拠り所とするためでした。真澄の著作のうち、特に地誌では、地名の由来を語るために多用されます。

「軍記物」といえば、一般には武勇や武功を重んじた物語を指します。合戦にかかわる書物（あるいは話）は、現在の視点からすると、史実と伝承が入り混じって双方を判別しにくいことから、本展では、「軍記物」を広義にとらえて紹介しました。

1 日記の中の軍記物

●浦城落城と三浦氏の物語

真澄は、現在の八郎潟町周辺で浦城城主三浦氏の滅亡にまつわる話を聞き、その話を《雪の道奥雪の出羽路》（享和元年〈1801〉）と《かすむ月星》（文化3年〈1806〉）に書き留めました。この三浦氏滅亡にまつわる話は、現在、安東氏一族による湊合戦を題材にした『秋田軍記』の一部分として伝わるなどしています。

また、真澄は、小池（八郎潟町）にある御前柳（ごぜんやなぎ）神社の縁起について、三浦氏滅亡の話を組み入れて《ひなの遊び（第六部）》（文化6年〈1809〉）に書き表し、さらに、随筆《久保田の落ち穂》（文政5年〈1822〉）では、三浦氏滅亡と御前柳神社の信仰を組み合わせた一つの物語として書き留めました。

秋田軍記（潟上市・郷土文化保存伝習館寄託資料、石川理紀之助旧蔵本三種の内の一種一冊、漢字ひらがな交じり文、写真は目次部分）

●海を渡った義経

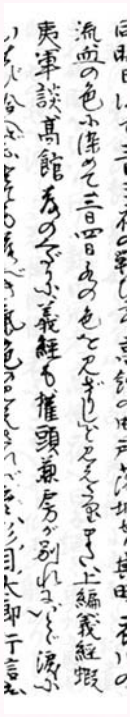
真澄は、源義経や弁慶にまつわる伝承を、旅の先々で記録しています。天明6年（1786）の《かすむ駒形》で平泉を訪れた際には、源義経が平泉の高館では死なずに、蝦夷島まで落ち延びたことを内容とする『上編義経蝦夷軍談』の一節を引用しました。

通俗義経蝦夷軍談（写本、館蔵は巻之一から巻之三を内容とする一冊のみ）

館収蔵分の記述によると、奥州藤原氏三代秀衡（ひでひら）の遺命によって、泰衡（やすひら）は源頼朝を欺き、義経を蝦夷島に逃がす。それは、韃靼（だったん）と蒙古（もうこ）に脅かされていた蝦夷島を守り、日本との交易を盛んにするためであった。本書は、10巻首1巻10冊本として明和5年（1768）に版行された。巻之十末に続編に続くことが書かれていることから（実際は版行されなかったようだ）、本書が「上編」として書き写されたものと考えられる。

かすむ駒形（部分、大館市立中央図書館蔵）

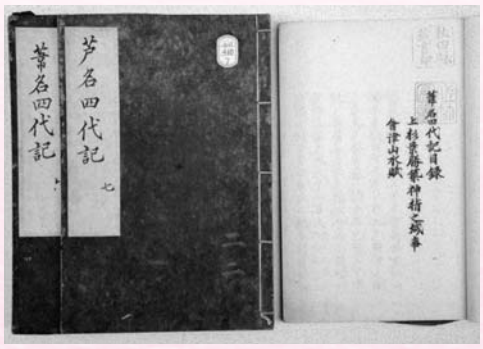
「上編義経蝦夷軍談、高館落のくだりに…」とある。この引用は『通俗義経蝦夷軍談』巻之一「忠衡、義経に高館に謁す」からの部分に相当する。



2 随筆の中の軍記物

真澄は、《筆のまにまに六》の「かうさしのしろ」で、上杉景勝が豊臣秀吉によって一時的に会津120万石に転封されたとき、家老の直江兼続が短期間に築城を試みた神指城（こうざし）について、『芦名四代記』巻八から引用しています。

同書は、戦国時代に会津地方に勢力を持っていた芦名氏が、相次ぐ当主の死去と周辺武将との合戦によって衰退していく顛末を記したもので、第16代当主芦名盛氏の死去から第20代当主芦名義広（佐竹義重の次男）が伊達政宗に敗れるまでのおよそ10年ほどの記録です。また、周辺武将の後日譚にも触れられています。会津地方の合戦記である『会津四家合考』を、芦名氏を中心にして抄録したものと考えられます。



芦名四代記（秋田県立図書館蔵）

本資料には、藩主佐竹家に伝わったことを示す「佐竹図書」の捺印がある。

3 地誌の中の軍記物

●軍記物引用の目的

全集で《花の出羽路の目》と仮題された資料には、真澄がまとめようとした秋田六郡の地誌の構成について記されたあと、「花の出羽路の目」として、秋田郡の地誌となる《花の出羽路》を構成する5種の目記名が挙げられています。このことから、「目」に「ナ」のルビを振るのは、目録と書名を兼ねたことからの文字遣いであることがわかります。

《花の出羽路の目》では、地誌編纂の参考となる書物の種類、さらに、秋田に関しては具体的な書名が挙げられています。地域の歴史や文化を書きあらわすためには、書物の種類として「いくさぶみ」（合戦を記した書物のことで、本展でいう「軍記物」）がその一つに挙げられ、秋田に関する軍記物としては、特に『奥羽永慶軍記』と『柞山峯之嵐』が挙げられています。

花の出羽路の目（館蔵）

※左に示す文字は、《花の出羽路の目》にある真澄自筆の文字です。秋田に関する書物四種を挙げています。

○永慶軍記

永慶軍記

『奥羽永慶軍記』

雄勝郡横堀村の医者であった戸部正直（一憨斎、1645～1707）が、十余年かけてまとめ上げたものである。永禄年間（1558～69）から慶長年間（1596～1614）までを中心とした奥羽（陸奥国と出羽国の総称）の合戦をまとめたことが書名の由来になっている。全39巻からなり、数少ない奥羽の戦国史を内容とするものとして貴重である。

○柞山峯之嵐

柞山みねの嵐

『柞山峯之嵐』

岡見知愛の著作で、「地誌」として分類されることがある。秋田藩領にあった古城を主に挙げて、その古城に拠った武将や合戦の経緯などを内容としている。

○鮑田六郡村日記

鮑田六郡村日記

『六郡郡邑記』

真澄が「岡見知愛の編集なり…」と書いていることなどから、『六郡郡邑記』を指すと考えられている。真澄の地誌には『六郡郡邑記』が随所に引用されている。真澄の手沢本が大館市立中央図書館蔵本として現存している。

○秋田故事艸

秋田故事艸

楢山（秋田市）に住んだ修験・長雄院北揚の撰とするが、現在までのところ不明。石井忠行も探索したが、わからなかったようである（『伊頭園茶話』巻六に書名と著者のみを掲出している）。

●後三年合戦、記録の引用

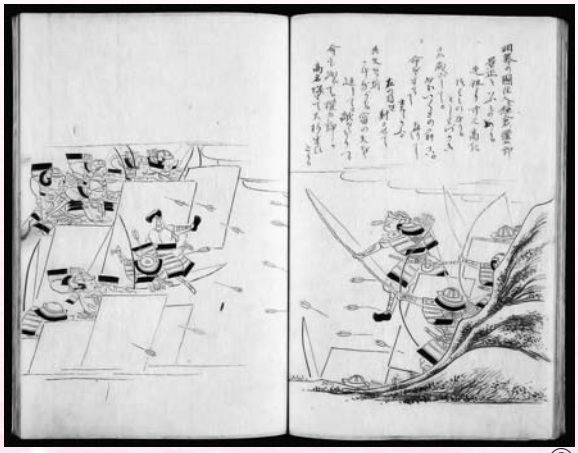
真澄は、《月の出羽路仙北郡十八》で、金沢（横手市、美郷町）を合戦の最後の舞台にした後三年合戦について、群書類従本の『奥州後三年記』を中心に引き写したほか、秋田藩士の後藤祐寛家にあった『後三年合戦絵詞』の模写本の絵部分を、西宮四壁（秋田の画人）に写させています。

後藤祐寛家の模写本は、現在の東京国立博物館所蔵本系統のもので、本来は上中下の三巻あるはずが、中巻だけがありませんでした。そのため、絵は上巻と下巻から写されています。また、冊子仕立てにするためと地元に密着させた絵柄にするために、さまざまな箇所で『後三年合戦絵詞』の構図や描写を変えるとともに、真澄の解釈に基づく描き加えもしています。

奥羽軍記（寛文２年-1662-版、横手市立増田図書館蔵）

群書類従第三百六十九、合戦部一（刷立本、個人蔵）

①



②

①…源義家勢の伴助兼が、戦いの最中に源家重代の薄金の兜を失う場面

②…鎌倉景正が清原勢に片眼を射られる場面

元になった『後三年合戦絵詞』では、①と②は同じ場面に描かれているが、冊子仕立ての地誌に入れるに際して、場面を分けて描いている。景正に対する清原勢は、『後三年合戦絵詞』では柵の中から応戦しているが、ここでは景正に相対するように描かれている。

寄贈図書

（平成22年2月～平成23年1月）

◆東北芸術工科大学東北文化研究センター「季刊東北学第22・23・24・25号」「まんだら第42・43・44・45号」「真澄学第5号」◆田口昌樹「あきた浪漫　第19・21・22・23・24号」「いわな第134・135・136号」◆菅江真澄研究会「菅江真澄研究第70・71・72号」「菅江真澄詠草短冊」◆高橋文太郎の軌跡を学ぶ会「渋沢敬三・高橋文太郎と民族学博物館」「高橋文太郎の真実と民族学博物館」◆川嶋印刷株式会社「菅江真澄と大原」◆（株）おうふう「悠久第119号」◆（株）角川書店「怪第29号」◆奈良女子大学日本アジア言語文化学会「叙説第37号」◆男鹿市教育委員会「男鹿市の文化財第16集」◆東日本旅客鉄道株式会社「トランヴェール2010年6月号」◆小笹鉄文「全国駒・馬の雪形」◆男鹿市菅江真澄研究会「男鹿五風（会誌第16号）」◆秋田魁新報社大曲支局「大曲の花火100年の魅力」◆東北電力（株）「白い国の詩秋号609号」◆谷口吉光「八郎潟と八郎太郎」◆石井正己「柳田国男の見た菅江真澄」◆高橋喬司「増補『雪の出羽路雄勝郡』旧稲川町ノート」◆鹿角市文化財保護協会「ふるさと鹿角」◆岩波書店「内なる他者のフォークロア」◆株式会社プラジオ「ALONG第25号」　他

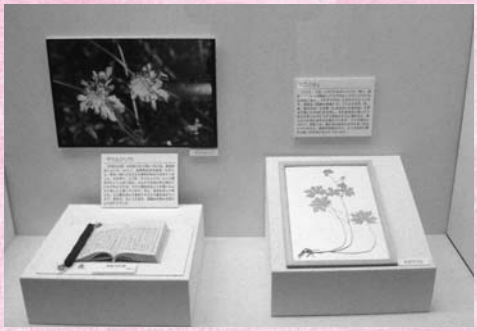
※寄贈図書は、スタディルームで御覧いただけます。

「表紙解説」に代えて

図絵は《奥の冬ごもり》（大館市立中央図書館蔵）、写真は平成22年6月9日撮影

真澄の日記の中では、個人的には下北の日記が一番充実していると思っている。だから、というわけではないが、真澄にかこつけて何度か下北を回っている。自分で回るのを第一としている。真澄が図絵に描いた場所で、どうしても見つけられない場所があった。赤川の滝だ。赤川集落を見渡してもそれらしい場所がなく、意を決して聞いてみた。平日だったから、とりわけ人通りも少ない。子連れのお母さんは知らないという。洗い物に出ていた年配の女性に聞いたら、ここの生まれじゃないから、と言われた。嫁いで来てから半世紀は経っているように見えたが、人のことはわからない。結局その日は、見つけることができなかった。後日、展示のための公務で下北を訪ねた折、地元の真澄研究の方たちからいろいろ案内していただいた。赤川の滝もだ。私が探し回った場所から、林道を十分以上も車で走っただろうか。先導車はジープで、こちらは小型車のレンタカー。車の腹をつかないように、枝で傷つけないように、気を遣いながらだから随分走った気がした。車を降りてから、ジャンパーを羽織って長靴を履いた。どちらも準備していただいたものだ。青森ヒバの枝につかまりながら崖を降りて、ようやく見えたのが赤川の滝だった。雪の降り始めた時期（旧暦の11月）に、真澄はなぜこんな場所まで来たのだろう。やっと見ることができた心の高ぶりと、だからこそわき起こる疑問。案内がなくては到底行けないから、下北に行ったら是非に、とは言いにくい。

企画コーナー展の展示スペースでは、コーナー展の合間に「収蔵資料の紹介」を行い、新たな展示の仕方を試みるなどしながら、真澄の著作をさまざまな視点から紹介しています。



真澄が記録した草花

主に日記に記録された草花について、写真とさく葉標本を合わせて紹介しました。

「菅江真澄の道二十景」の紹介

石井柳次さん（秋田市）から寄贈していただいた自作版画「菅江真澄の道二十景」を、画題の元になった真澄の著作などとともに紹介しました。

編集後記

・これまでの広報紙「真澄」を見返してみると、第７号から「表紙解説」を書いている。今号のように、柔らかな文章は初めてだ。「赤川は、地質の関係で…」などと、よくわかりもしない分野から書き始めるのが億劫なこともあったが、ようやく現地にたどり着いた感動が大きかったからだ。案内していただいた下北の方たちをはじめ、振り返ってみると、今年度も展示のたびにさまざまな方たちから御協力や御援助をいただいた。本紙をまとめながら、感謝の念を新たにしている。（松山）

真澄 MASUMI No.28

発　行　日◎平成23年３月
編集・発行◎秋田県立博物館　菅江真澄資料センター
〒010-0124秋田市金足鳰崎字後山52
℡018-873-4121（代）